

平成28年3月10日

学術情報メディアセンターの2つの計算機が「情報処理技術遺産」に認定

一般社団法人情報処理学会では、我が国のコンピュータ技術発達史上の貴重な研究開発成果や国民生活、経済、社会、文化などに顕著な影響を与えたコンピュータ技術や製品など、次世代に継承していく上で重要な意義を持つ情報処理技術遺産の保存と活用を図るために、2008年度より情報処理技術遺産認定制度を設けています。

このたび2015年度の「情報処理技術遺産」として、京都大学学術情報メディアセンター（前身の情報処理教育センター、大型計算機センター）に関係する以下の2つの計算機が認定されましたのでお知らせします。

本件認定式は、3月10日に慶應義塾大学にて情報処理学会第78回全国大会において行われました。

【情報処理技術遺産】

(1) KDC-1論理パッケージ

1960年に京都大学と日立製作所で共同開発され、我が国の大学初の計算センターで共同利用されたKDC-1の構成部品。

(2) TTL論理回路カード（FACOM 230-60搭載）

1968年に富士通で開発され、マルチプロセッサシステムとして世界に先駆けICを全面採用したFACOM 230-60の構成部品。1号機は1969年の京都大学大型計算機センター開設時に運用開始されました。

(1)のKDC-1論理パッケージは、本学の矢島脩三名誉教授が大学院生のときに中心となって日立製作所と開発した、我が国大学向けとしては最初のトランジスタ計算機です。クロック230KHzで浮動小数点演算機能を有しました。磁気ドラムに加え、磁気コアメモリを備え、磁気テープ装置も開発されました。1959年暮れに本体主要部が稼働し、浮動小数点演算部を含め本体のすべてが1960年4月に完成しました。1960年7月には磁気テープ装置を含むKDC-1全体が完成し、京都大学工学部に設置されました。1961年1月に我が国大学初の計算センターである「電子計算機室」が発足し、同年4月よりKDC-1による全学サービスが開始され、約15年間共同利用されました。この情報処理

教育の全学サービスの重要性は高く認識され、その後、情報処理教育センター、総合情報メディアセンター、学術情報メディアセンターと発展的に継承されています。同機は、産学共同開発、国産機の政府機関による採用という観点からみても記念すべきものでもあります。

一方、(2)の TTL 論理回路カードは、大学等の研究者が学術研究に伴う計算処理を行うために利用する全国共同利用施設の一つとして 1969 年に京都大学に設置された大型計算機センターの、初代のシステムである FACOM230-60 に搭載されていたものです。FACOM230-60 は、全面的にモノリシック IC を採用した当時国産最高性能のマルチプロセッサシステムであり、学術情報メディアセンターのスーパーコンピュータシステムの原点と言うべきシステムです。

(1)の論理パッケージは、矢島名誉教授が退官後に、本学の大学文書館に寄贈し、保管されていましたが、このたびの技術遺産認定を受けて、学術情報メディアセンター北館 3 階の資料室で、(2)の FACOM 230-60 の TTL 論理回路カードなどとあわせて展示されることになりました（見学は要予約）。

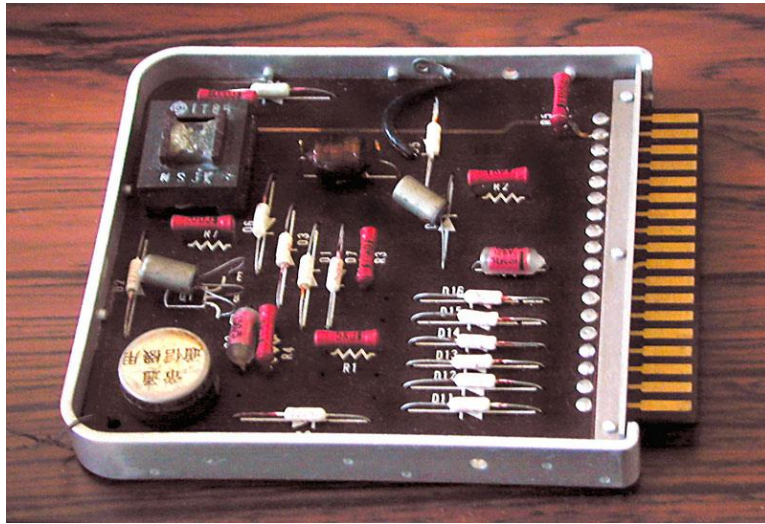
(照会・見学申込先)

京都大学学術情報メディアセンター

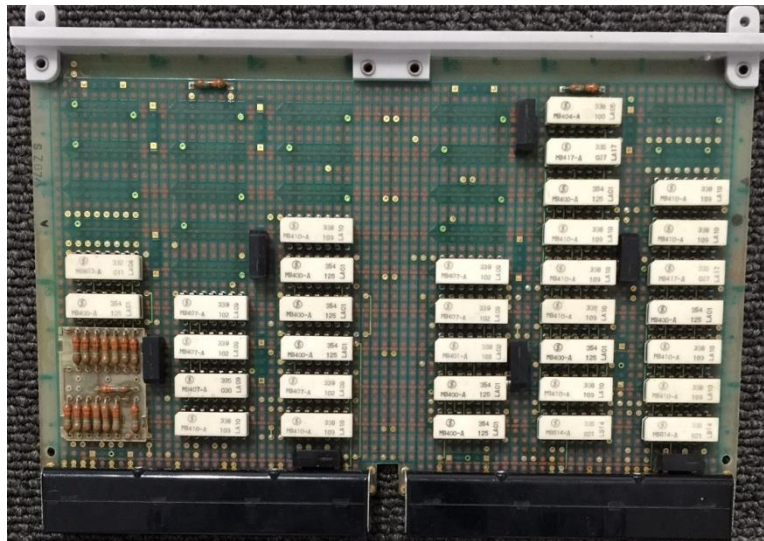
〒606-8501 京都市左京区吉田本町

TEL 075-753-7400 FAX 075-753-7450 (代表)

E-mail: soumu@media.kyoto-u.ac.jp



(1) KDC-1 論理パッケージ



(2) TTL 論理回路カード (FACOM 230-60 搭載)

(参考)

情報処理学会コンピュータ博物館 <http://museum.ipsj.or.jp/>